

る。五料の常楽寺は同地区の飯玉神社の別当寺とのことであるが、手許に資料がないのでこれ以上は言及できぬ。これら不明の点については諸賢の御教示が得られれば有難い。

○相通う神と仏

目下連載中の司馬遼太郎小説（読売）の「箱根の坂」の一節に、

早雲は、駿府の浅間宮へでも行くこうときめた。浅間宮という神の殿舎は、この当時仏教と習合して浅間大菩薩などとよばれており、駿府きつての一大宗教権威であつた。（中略）浅間宮は富士山を神体としてまつている。

とある。これを少しく説明すると、浅間様は山岳信仰の富士を神体とし、祭神は木花開耶姫で、天孫ニギノミコトの妃である。この神が八幡様と同じく浅間大菩薩と称せられている。神仏習合ではこのように一人で神と仏とを兼ねているケースもあるが、又異なる神と仏で同一の信仰対象となっているものも多い。以下そういう類を

いくつか紹介しよう。

◇茶枳尼天

農業神稻荷は神道ではウガノミタマなどと称する神で、狐がこの神の使いであるが、仏教殊に真言宗では稻荷の神体を大黒天に属する夜叉茶枳尼天とし、白農狐菩薩と称したので、俗には稻荷神↓茶枳尼天↓狐と考えられている。

◇馬鳴様

繭や生糸は現金収入の多くを占めていたので、農家では特に養蚕の神を単独に祀った。神では蚕影大神、仏では馬鳴様である。蚕影様の本社は常陸の蚕影山で、同社縁起によると、インドの継子物語として語られているが、どうも日本出来のようである。即ち、継子の姫が桑の木に載せられ、それが日本に流れつき、その遺骸が化して蚕になった。これが蚕影様だといっているのである。

東北地方にはおしら様信仰がある。やはり人が蚕に化して、それが神となりおしら様といわれるというのであるが、これは中国の馬頭娘の話に基くものようである。即ち、遠く離れている父を恋しがった娘が、飼馬に父を

連れて来てくれれば妻になると約束する。馬は勇んで父を載せてきたが、親の反対で娘を貰えず馬は殺され皮を剥がれた。これが娘にまといつき、共に化して蚕になり、桑の木に繭を作ったというのである。中国の宋の時代の書物には、この馬頭娘蚕神を馬鳴菩薩として信仰したと記している。

角洲の本泉寺墓地内の薬師堂には、この馬鳴様の木像がある。漆塗りで、六臂あり、耕・糸巻棒・掃立箒・桑の枝などを持ち、糸で繫いだ繭が供えられていた。高さは一・五メートルぐらいで、衣服・台座・光背共に金びかの立派なものである。蚕神を保食神としたり、絹笠様とすることもあるが、これは神道からである。

◇牛頭天王 牛頭天王、略して天王様はもとインドの厄病の神で、平安時代京都で伝染病流行の時、この災厄を免れるために八坂神社にこれを祀り、祇園社と称して、毎年盛大な祭礼が行われた。この牛頭天王が荒ら神なので性格の似ておるスサノオの命と習合した。であるから、四丁目の山車は祇園祭の時、八岐大蛇退治の剣をもつこの命の人形を飾って曳いた。又、上陽飯塚・藤川地区の

悪魔払いも祇園神事であるが、これは日本で一般に行われる民俗に従い、俵の蓋で作った「獅子頭」をかぶり、厄病（悪魔）を払うという趣旨は天王様と同じである。

◇青面金剛 庚申は元来中国の民間宗教である道教の三尸説から来ている。道教に従えば、人間の腹中には三尸なる虫がいて、庚申の夜、人の寝ている間に、昇天して天帝に人の犯した罪悪を告げ、死命を制せしめる。起きていると虫が脱け出して昇天できない。だから、昇天されないように、庚申の夜は寝ないように、沢山飲食して夜を過ごす。

この庚申の本尊を青面金剛（青面尊とも）として祀ったのであるが、これはもとインドの土俗神で、ひいては仏教にとり入れられ、病魔を除く鬼神に位置づけられた。身体は名前の如く青く、手は六臂で、矛・弓矢・法輪・剣及び婦人（シヨケラ、赤兒ともいう）を持ち、脚下に邪鬼を踏まえている。

ところが、神道では庚申の神を猿田彦大神とした。猿田彦は神話によれば、天孫ニギの命が日向の国に天降った時、天の八街に迎えて、高千穂峰まで案内した神で